

# 村落における文字文化への離陸と子ども

——手習教訓書の成立とその背景——

高橋 敏

はじめに

一 村落社会と教育

二 村落文字文化

三 文字文化への離陸と村落

おわりに

## 論文要旨

子どもと文字文化の関連性については、従来からプラスの評価がなされるのが通例であった。しかし、無文字文化を基調とする村落社会に埋没していた子どもが文字文化の習得に向うに際しては、すべてがこの動きを肯定したわけではなく、激しいリアクションが加えられていた。換言するなら、文字文化は強力な無文字文化の抵抗に耐えて村落社会へ定着していったのである。この教育・文化の変動を伝える史料は少ない。

小論で紹介した「イロハ異見」や「世話字往来」は、村落社会にあって文字文化を子どもに学ばせることを使命と考えた幕末期の百姓文人、手習師匠が遺した稀少な文献である。手習師匠から見た村落社会における子どもの生々しい

姿が映されている。

彼らは全面的文字文化の肯定の上に、文字文化の学習を推進したのではなく、その前提としてヒトが人間になるための社会共同の教育が必要不可欠であることを十分に承知していた。また、すでに始まっていた親の子どもへの偏った愛情のあらわれを批判し、子どもの成長にとって村共同の敵しい対応を求めている。そこには、自生的に応汎に展開し始めた文字文化に対する強い警戒心が認められるのである。

文字文化の展開を前に、自己制御の機能を失いつつある現今の状況を見るにつけ、村落社会における文字文化の離陸の実態を考える意味もあろう。